

二〇一二年 卒業論文

現代人にとっての幸せと親鸞聖人の教え

L0900006

阿部 智慧子

目次

序論	1
本論	2
第一章 現代人にとっての幸福とは	2
第一節 幸福を求める現代人	2
第二節 現代人の死に対する理解	5
第二章 親鸞聖人の幸福の捉え方	8
第一節 親鸞聖人の利益観	8
第二節 本願に出遇う	12
第三章 親鸞聖人の生死観	15
第一節 死と向き合う心	15
第二節 苦しみがあるからこそ	19
結論	22

註

参考文献

序論

人間は、幸せを求めて生きている。自ら不幸を求めて生きている人などいない。幸せになることを夢見て、懸命に努力している。いつもさまざまな理想や願いをもって生きている私たちは、その願いや理想が実現されることを常に望んでいる。しかし、現実の世界ではなかなか思い通りには展開しない。早く幸せになりたいのに、現実はいかず、そのことを悩み、苦しみ、早くその苦悩から脱出したいともがき苦しむ。科学が発達し、物も豊かになり、より快適に過ごすことができるようになったはずなのに、私たち人間の心は満たされないのである。また、現代人は幸せを求めながらも、自分は不幸なのだと感じ、孤独感にさいなまれている。さらには自分のこれから考えたときに、何とも言えない不安が押し寄せ、心のよりどころを見失うのである。いずれ訪れるであろう「死」は、人生の終点なのだと考え、孤独感から抜け出せないでいる。

では、本当の幸せとはいったいどういうものなのであろうか。私たちは何をよりどころにし、何を頼りに生きていくべきなのか。親鸞聖人は『一念多念文意』で、

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。

（『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下、『註釈版』と記載）六九三頁）

といわれている。煩惱は誰もが持っているものであり、それを完全に無くしてしまうことはできないのである。そのような人間の本性を認め、自分自身と向き合っていくことで、見出せるものがあるのではないか。ここでは、

「幸せ」という言葉に論点をおき、現代人と親鸞聖人との思想を比較していききたい。そして、親鸞聖人の教えに触れていく中で、今を生きる現代人には何が必要なのか、現代人がよりどころとすべき場所はどこであるのか、考えていきたいと思う。

本論

第一章 現代人にとっての幸福とは

第一節 幸福を求める現代人

人間はいつもたくさんの欲望を抱えて生きている。人間の欲望は無限のものといわれており、いつまでも果てしなく続くものである。そして、その欲望を満たすことこそが幸せへの第一歩だと私たちは考えている。欲望が充足されればされるだけ幸福になれるというわけである。欲しかったものが手に入ったとき、ずっと望んでいたことが実現できたとき、私たちの心は満たされる。五感を楽しませることで心を満たし、それこそが幸福なのだと思います、求め続けているのである。五感を快く楽しませることで生まれる幸福感を外樂といい、使命感に燃え、自分の生きがいを感じることで生まれる幸福感を、内樂という。(1)

ところが、その幸せは長くは続かない。私たちは、いつも自分の目を自己以外の世界に向けがちであり、これ

を自己の内側に向けることを忘れがちである。(2) 幸せは自分の外側にあるものだと思いついては、本当の幸せを感じることはできないのだ。自分の思い通りになることを幸せだと考え、思い通りにならないことを不幸せだと決めつけているその心こそが、私たちを思い悩ます原因になっている。私たちの人生に苦悩が絶えないのは、幸福を達成しようとする努力が足りないからではない。自分の思いが満たされることに幸福があるという、とらわれを離れられないからである。(3) 何事も自分の思い通りの考え方が通じているうちは、毎日の生活を楽しく豊かに過ごしていくことができるかもしれないが、思い通りにならなくなると、「こんなはずではなかった。どうしてこうなってしまったのだろうか」などと言って、心に隙間があいたような感覚に陥りながら毎日を送らなければならなくなるのである。浅井成海氏は、

では、私たちの願う幸せとは何でしょうか。いつまでも若く、常に青春を謳歌し、あたたかい家庭の愛情に包まれて、どの子も皆、親孝行で、そのうえ健康に恵まれ、病気もせず、いつまでも長生きすることができ、さらにお金の苦勞を知らない、使っても使ってもへららない、打ち出の小づちがあればよい—ということでしょうか。

虫のいい考え方のようですが、私の心の底には、今述べたようなさまざまな願いがあつて、その願いがくずれることなく、常に満たされておれば幸せだなと感じ、これらのどれかひとつでもかなえられねば、どうしてこのような不幸なことに出合うのであろうか、私ほど不幸な者はないと、沈み込んでしまうのです。また、あらゆる方法を尽くし、努力してもなかなかうまくいかないときは、神仏にお願いをし、その力をお借

りして、自分の願いを成し遂げようとするのです。・・・中略・・・

ともすると日本人は、年のはじめに、神様に無病息災、家内安全をお願いし、神社仏閣にお参りすることが、あつい宗教心であると考えがちです。しかし、これは、ないものねだりをしているのと同じことであって、因と縁の熟すところ、いかに神仏にお願いしても、われわれはどのような苦しみや悲しみにも出合っていかなければならないのです。私たちは皆、このようにこわれやすい幸せを願って、その幸せはあたかも永遠にこわれぬかのように錯覚して、幸せを求めているということになります。(4)

と述べられており、私たちの願っている幸せはとても壊れやすいものであって、私たちはその幸せを壊れないように、崩れないように、必死に願っているのだといわれている。壊れていくものや崩れていくものというのは、いずれ自分の前から消えていってしまう。とすると、ずっと私の身の中に存在する幸せというのは、どういうものなのだろうか。小山一行氏は、

幸と不幸、善と悪、苦と楽、私たちは常に何らかの価値基準によって物事を二つに分離し、不幸を避けて幸福を求め、悪を廃して善を修め、苦を無くしたところに樂があると考える。しかし、両者を二つに分ける基準そのものは、結局「自分の思い」に過ぎないのではあるまいか。かくして、自分の思い通りになることを幸せと考え、自分に都合の良いことを善と考える。この「自我」へのとらわれ（＝我執）こそが、私たちの人生を悩ます根本原因であることを教えたのが仏教である。(5)

と述べている。私たちが普段思い描いている幸せは、本当の幸せだといえるだろうか。豊かな生活を送れること

が、生きている喜びには繋がらない。どんなに豊かに、便利に、快適に、楽しく暮らしたとしても、そのど真ん中で手ごたえのないむなしさというものを、ますます確かめねばならなくなった。生きることが自分にとっていかなることなのか、それがわからなくなった。そして、ただただ自分をもてあますというよりほかに道がなくなった。そういう姿が今日の私たちの生きざまではないのか。⁽⁶⁾ それでは、永遠に続く本当の幸せとはいったいどんなものなのであろうか。

第二節 現代人の死に対する理解

私たち人間は、人生の終わりが死であると認識している。「生きること」については毎日のように思い悩んでいるが、「死ぬこと」についてはなるべく考えることを避けているように思われる。現代では、自分は幸せにはなれないという虚無感や、自分の行く末を思ったとき不安感に襲われ、孤独にさいなまれている人びとが多く存在する。加藤智見氏は、

現代人について語るときのキーワードとして「孤独感」という言葉がある。いじめに苦しみ、自殺、場合によっては他殺に走る子どもたちが多くなった。若者の中には、友達ができない、親が信じられない、上司が怖いと閉じこもり、登校拒否や出社拒否をしたり、社会を恨み、自立できなくなっているケースもある。・・・中略・・・さらに深刻な問題は、死と死後の世界についての信念や信仰がもてないという点だ。自分の行く末を思うとき、底なし沼のような不安と孤独感が待っている。⁽⁷⁾

と述べている。

現代は多くの問題を抱えており、私たちはいつも不安や苦悩に追われながら毎日を生きている。現代という時代は人間性喪失の時代であるといわれている。人間らしさ、人間としての温かみが欠落してきている時代が互いを取り巻いている社会の状態ではないのか。⁽⁸⁾ そうした社会状況の中で死について考えたとき、私たちが死に抱く感情として、「恐怖」や「孤独」というキーワードが真っ先に出てくるのではないだろうか。人生の終点を死であると考えている現代人は、生と死が常に隣り合わせであるということになかなか気づかないのである。

また、現代は死に直面するという機会が少なくなっているように思う。できるだけ死は見たくないという考えが、現代に染みついていく。青木新門氏は、現代は死を隠してしまっている時代だと述べ、

「生」だけに重点がおかれて、社会が構成されている。社会のパラダイムっていうのが出来ている。「生」のみに価値がある。病院がそうですね、正面玄関から入れ正面玄関から帰すことが医者使命感になっていきます。霊安室に向かうのは悪であり、正面玄関から帰すということが善であるという思想で、病院は成立しています。

最近、病院の看護師さんの集まりに、呼ばれることがあります。「何故私をお呼びになられたのですか」と、婦長さんに聞きますと、「いや、この頃の若い看護師さんは、元気なおじいちゃんの中にはしょっちゅう行くのだけど、その人が亡くなるうとすると、その病室へ行かなくなっちゃうので、死のお話をして頂こうと思つて」なんてことを言われたりする。死を避け、死から眼をそむける姿勢が自ずから行動に現れるのでしょ

う。「生」のみで、「死」を隠蔽する、「死」を隠す。このことは、病院だけではないと思います。世間一般にこの風潮があります。・・・中略・・・

僕は思うのですが、「生・老・病・死」というのは、人間の人生の当然の姿ですが、これを隠してしまわずと「闇」が生まれます。(9)

といわれている。「生は善であり、死は悪である」、「生きることは美しく、死んでくことは忌み嫌うもの」——このような思想を持っているは、私たちのこれから先の人生は闇しかないということにならないだろうか。生きることだけに目を向け、死ぬことに関しては向き合おうとしないというのが、現代人に多く見られる風潮なのである。

村上速水氏と内藤知康氏は『親鸞聖人のことば』で、

我々は、生の終わりに死があるように考えているが、実は生と死は一枚の紙の両面のようなものであり、生の裏側には常に死が潜んでいる。そしてその表裏は簡単に逆転し、裏に潜んでいる死が突如として表にあらわれる。生は死の否定であり、死は生の否定である。それにも関わらず、生と死は一体のものである。すなわち、生は常に自らを絶対否定する死と共にある。このような矛盾に満ちた生を生きている我々であるからこそ、生の依るところ、死の帰すところ、すなわち生死の帰依処を明らかにしなければならぬ。これが聖人の言われる「生死出づべき道」であろう。しかも、その「生死出づべき道」は、今現在解決されなければならぬ問題であって、いつか解決されればよいという悠長な問題ではない。生死の鎖はまさに今断ち切らなければならない。(10)

といわれている。生きていることと死ぬことは切っても切り離せない存在なのだ。私たちが死をどう受け止めるのかということは、これから先に思い描いている人生にも大きく関わっていくようである。現代人には、死の問題から目をそむけずに生きていくことの重大さに気づいていく必要がある。殺人事件や自殺、いじめなど多くの問題が渦巻いているこの現代で、もう一度死について考える機会はとても重要であると考える。

第二章 親鸞聖人の幸福の捉え方

第一節 親鸞聖人の利益観

現代人が考える「利益」とは、どういうことをいうだろうか。自分の欲望を満たすことが幸せであると思いついて、現代人は、その欲望が満たされたときや、自分の願いが思い通りに叶ったとき、「ご利益によって救われた」とか「利益を得ることができた」などというのである。たとえば受験生の多くは入試の前になると急に信心深くなり、神社仏閣に合格祈願をしてまわる。しかし試験が終わるとそんなことを忘れ、合格すれば自分の実力で入ったと思いき、失敗すればせっかとお賽銭を入れたのにご利益がなかったと、神社を逆恨みしたりする。本当に利益を求めるなら、神仏の教えを知り、それによって入試のための心構えをすべきであろう。(11) それでは、親鸞聖人のいう利益とは、どういうものなのであろうか。

親鸞聖人は『高僧和讃』で、

仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば これも雑修となづけてぞ 千中無一ときらはるる

〔註釈版〕五九〇頁

と述べられている。これは、「南無阿弥陀仏ともっぱら称えても、現世の利益を祈る人は、これまた雑修と名づけて、千人の中に一人も往生する人はないと嫌われる」ということである。⁽¹²⁾ どんなに念仏を称えたとしても、目の前の欲望だけにとらわれ、それを満たすための道具として念仏を称えていては、千人いたとしてもその誰一人として救われないのだということ強く主張されているのではないだろうか。また、親鸞聖人は『教行信証』「信巻」で、

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。〔註釈版〕二五一頁

と説かれ、現世において得られる十種の利益を示されている。十種の益というのは、

- (一) 冥衆護持の益 (眼に見えない方々にいつも護られるという利益)
- (二) 至徳具足の益 (名号にこめられたこの上ない尊い徳が身にそなわるといふ利益)
- (三) 転悪成善の益 (罪悪が転じて善となるという利益)
- (四) 諸仏護念の益 (仏がたに護られるという利益)
- (五) 諸仏称讃の益 (仏がたにほめたたえられるという利益)
- (六) 心光常護の益 (阿弥陀仏の光明に摂め取られて常に護られるという利益)
- (七) 心多歡喜の益 (心に喜びが多いという利益)

(八) 知恩報徳の益 (如来の恩を知りその徳に報謝するという利益)

(九) 常行大悲の益 (常に如来の大いなる慈悲を広めるといふ利益)

(十) 正定聚の益 (正定聚に入るといふ利益)

の十種である。(13)これらは欲望なのではなく、喜びであるといえる。なかでも、私たちが念仏をし、阿弥陀仏の誓いを受け入れることで、常に阿弥陀仏が私たちを護っていてくださるといふ喜びに気づかされるといふことをあらわしているのが、(六)の心光常護の益である。親鸞聖人は、いつも自分中心の心を持っている私たちでさえも、阿弥陀仏に護られ、必ず救われるのだといふことのありがたさを主張されたのではないだろうか。村上速水氏は、

ここで考えてみなければならぬことは、かりに私たちの望むものが何でも与えられたら、それで私たちはほんとうに幸せになれるかどうかということです。たしかに、貧しい人にお金が与えられ、病気の人が健康になったら、幸せを感じることもできるでしょう。しかし、それでその人はもうそれ以上に望むことはなくなるでしょうか。しばらくはそれで幸福感を味わうことができるとしても、やがてきつとそれ以上のものを望むようになるにちがいありません。そしてそれも与えられたとしたら、その人は今度はきつと持てるものの悩みを味わうにちがいありません。．．．中略．．．持てる者には持てる者の悩みがあり、持たない人には持たない人の悩みがあります。これこそ、私たち人類が、何万年の昔から、くりかえし経験してきた偽りのない人生の相ではないでしょうか。

と述べられており、私たちの望むものが何でも与えられるということが、直ちに無量の徳とはいえず、かえってそれに苦しむこともある。本当に無量の徳といわれるのは、あればあつて喜び、なければなくて喜べる、そういう有無を超えたところにあるのではないかと結ばれている。(14) 私たち現代人は、苦しみをなるべく避けようとする。幸せに通じる道には苦しみはなるべく少ない方がいい。そう考えている人は多いのではないだろうか。しかし、苦しみを避けることが必ずしも幸せに通じているのかというと、決してそうとはいえないのである。苦しみに満ちた世界だからこそ見出せるものがある。親鸞聖人は現世において得ることのできる信心の喜びを、利益として説かれたのではないかと考える。親鸞聖人の書かれた『浄土和讃』の中に、「現世利益和讃」として、十五種の和讃があげられている。その中に、

南無阿弥陀仏をとふれば この世の利益きはもなし 流転輪廻のつみきえて 定業中天のぞこりぬ

（『註釈版』五七四頁）

と説かれた箇所がある。ここでは、南無阿弥陀仏の六字にこめられている如来のお心がいただけ、お念仏称える者は、如来の摂取の心光の中に包まれ、明るい人生を賜り、この世の利益にはきわまりがない。迷いの生死を流転輪廻しなければならぬ罪が消え、生まれつき定まっている寿命であるとか、寿命を全うせず中途で死ぬとかいうこともなく、寿命を延ばしてただけるのであるということ言われている。(15) 欲望にかられて念仏を称えるのではなく、本願を信じ念仏を称えればこの世には限りない利益がそなわっているのだと喜びをあらわされている。生と死、幸と不幸、苦と楽という分別は、私たちの迷妄によって生み出された価値に過ぎないのであ

って、この世界ははじめからそうした対立を超えた安らぎの中にある。(16) 親鸞聖人は本願を信じて念仏するといふことの中に、確かな喜びを感じておられたのである。

第二節 本願に出遇う

本願というのは、法蔵菩薩が因位のとくに起こした衆生を救済するという誓いであり、衆生を救済するためのまさしく根本となる願である。阿弥陀仏の四十八願のうち、特に第十八願を本願と称している。(17) その第十八願というのが、

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。
〔註釈版〕十八頁

というものである。「十方の衆生が浄土に生まれることができなければ、自分はさとりは開かない」といい、衆生の往生と自身の正覺とを一体に誓ったこの願こそ、阿弥陀仏の根本意趣を示すものなのである。(18) 親鸞聖人もこの本願に出遇う喜びを書きあらわされており、『正像末和讃』では、

願力無窮にましませば 罪業深重もおもからず 仏智無辺にましませば 散乱放逸もすてられず

〔註釈版〕六〇六頁

といわれている。大いなる本願の世界は、広々として限りなく、いかなる罪業の身であろうとも、問題ではないのだ。仏の智慧は、はかり知れないから、いかなるわがままであっても、包まれてしまうのである、と大いなる

願いの中にある喜びをうたっている。(19)念仏の中で生き抜かれた親鸞聖人は、阿弥陀仏の本願に包まれて生きていくことはたいへんな幸せであるということ伝えていっているのではないだろうか。すなわち、親鸞聖人は、本願と出遇い、念仏するということは、阿弥陀仏の救いの中にあるという、他力によって生かされていく道であるということを明らかにされたのである。

親鸞聖人の『教行信証』「行巻」の中の言葉で、

他力といふは如来の本願力なり

〔註釈版〕二九〇頁

というものがある。親鸞聖人のいわれる他力とは、どういうものをいうのであろうか。

現代では、他力は自力に対するものであると理解される場合が多い。自力は自分の力で努力することで、他力には人に任せて自分では何もしないということであると認識している人がほとんどではないだろうか。「自分で何とかしなければ。他力本願ではだめだよ」というような言葉を聞いたこともあるだろう。しかし、親鸞聖人のいう他力とは、自分で何もせず他人に頼るといふ生き方を示しているのではない。親鸞聖人は『親鸞聖人御消息』において、

まづ自力と申すことは、行者のおのおの縁にしたがひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのころをもつて身口意のみだれごころをつくるひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択摂取したまへる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり。・・・中略・・・凡夫はもとより煩惱具足したる

ゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがころよければ、往生すべしとおもふべからず。

『註釈版』七四六頁

と書かれている。ここでは、他力というのは、阿弥陀仏の四十八願の中で、真実の願として選び取ってくださった第十八の念仏往生の本願を疑いなく信じることを他力であるといわれ、凡夫は煩惱を身にそなえているのだから、自分は悪いものであると知るべきであるとされ、自らの心が善いから、往生ができるはずだとは思ってはならないと主張されている。(20)

他力本願の他力とは、阿弥陀仏のすべての人を平等に救う力のことなのである。そして本願とは、阿弥陀仏のすべての人を必ず救うという強い願いのことなのだ。他力本願の生き方とは、自己中心の心から離れられず真実に背いた生き方をしている私が、阿弥陀仏のはたらきに出遇うことによって、自らの愚かさ気づかされると同時に、少しずつではあるけれど、真実の生き方へと方向転換されていくような生き方なのである。(21) 村上速水氏と内藤知康氏は、

目によつてもものを見る。どこまでも自力である。その限りにおいて自力である。しかし、はたして自分の力であろうか。闇の中ではものを見ることは不可能である。闇が晴れた明るさのなかでのみ可能である。とすれば、光明こそ、ものを見せる力であるとしなければならぬ。今いう他力とは、そういう人間の在り方の根底を支えるものにおいていうものでなければならぬ。(22)

と述べられている。自分の思い通りに願いが叶うことこそが幸福であると考え、苦しみから逃れようと必死にな

っている私たちに対しても、平等に救われる道がある。自分の欲望にとらわれて迷い苦しんでいる私たちが、本願に出遇うことによって、自分を見つめ直すことができる。私たちは、多くのものに支えられて生かされている。しかし、そのことになかなか気づけないでいる。そんな私たちを責めるのではなく、真実の世界に目覚めさせてくれるはたらきこそが阿弥陀仏の力なのである。親鸞聖人は『高僧和讃』において、

本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき　功德の宝海みちみちて　煩惱の濁水へだてなし

（『註釈版』五八〇頁）

と書かれている。本願のはたらきに出遇うと、むなしいときを過ごす人はなく、宝の海のような功德が身に満ちて、濁った水のような煩惱も妨げになることはないというのである。²³ 親鸞聖人にとって本願に出遇うということとはとても大きな喜びであり、それこそが幸福へ通じる道であったのだろう。親鸞聖人は、煩惱にまみれ、悩みながら生きている私たちに、本願に出遇うことの大きい喜びを、身をもってあらわされたのである。

第三章 親鸞聖人の生死観

第一節 死と向き合う心

親鸞聖人が亡くなられる二年前である八十八歳のとき、全国的に激しい飢饉に見舞われた。加えて疫病の流行によって各地に多数の死者を出したとされている。²⁴ そのような惨状の中、弟子であった乗信房が親鸞聖人に宛

てて手紙を出している。「念仏の教えに遇っていた人びとが、去年から今年の大飢饉の中で、たいそう苦しんで病気で亡くなったり、飢えて亡くなっていった。お念仏さえ出ずに亡くなっていった人びともいる。仏の救いに臨終がどうであろうとも、念仏が出てこなくとも、仏の世界に往生することは間違いないと聞いているのだが、それで間違いないのだろうか。」というような質問があつたとされる。²⁵ それに対して親鸞聖人は、多くの人びとが飢饉や疫病で亡くなっていったのは本当に哀れなことであるが、その事実はどうしても受け止めていかなければならないのだということをいわれている。『親鸞聖人御消息』に、親鸞聖人が乗信房に宛てた手紙がある。

なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ。まづ善信（親鸞）が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは、疑なければ正定聚に住することにて候ふなり。さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり。としごろ、おのおのに申し候ひしこと、たがはずこそ候へ。かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで、往生をとげさせたまひ候ふべし。

・・・中略・・ひとびとにすかさせさせたまはで、御信心たぢろかせたまはずして、おのおの御往生候ふべきなり。ただし、ひとにすかさせさせたまひ候はずとも、信心の定まらぬ人は正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。

乗信房にかやうに申し候ふやうを、ひとびとにも申され候ふべし。あなかしこ、あなかしこ。

というものである。死というものは誰もが予期できないものであり、それは生死無常のことわりであって、驚くべきことではないと諭している。驚くべきことは、むしろ何時死んでも不思議でない自分が、いまこうして生きているという事実であるといわねばならない。そこに束の間の「いのち」に無限の想いを込めて生き、その意味を全うしようとする生き方がなされなければならない。それは阿弥陀仏の仰せのままに本願を信じ念仏して浄土へ生まれていくことである。(26)死は、つらく悲しい出来事である。死を受け入れることは、簡単なことではない。しかし、どんなに悲しいことであっても、それは不幸になるというわけではない。「死は怖い、死にたくない」と思うのではなく、それを受け止めて、どのように道を歩み乗り越えていくのかということが大切なのだ。親鸞聖人は、死というものは、周りの人びとだけでなく、自分自身こそが逃げきれることのできない事実であると受け止めようとしていたのである。

また、親鸞聖人は「まづ善信（親鸞）が身には、臨終の善悪をば申さず」といわれている。どんな臨終を迎えたとしても、その善し悪しは問題にはならないというのである。山崎龍明氏は、

人間の評価は、その人の「死に方」できまるのではない、というのが親鸞の世界でした。「安らかな死」「苦しみながらの死」、そんなことは人間のたしかさ、信仰のたしかさとはまったく無関係である、と親鸞は言うています。・・・中略・・・

こんにち、私たちは、人の「死」にも無関心ではられません。そして、私自身の「死」についても…。

しかし、その多くは「死」そのものについての関心ではなく、「死」に方についての関心です。どのような死に方をするか、あるいはしたか、が関心の中心になっているかぎり、まだまだ本質的なものとはいえないでしょう。

親鸞の関心は、まったくそこにはありませんでした。親鸞の関心は「生き方」そのものにありました。「どのような生き方をしているか」「どのような生き方をしなければならないか」というところに、親鸞の関心はあったのです。(27)

と述べている。私たち現代人の中で、「安らかに死を迎えたい」と願う人はどれほどいるであろうか。安らかな死を迎えることが幸せであると考えている人も大勢いるだろう。しかし、親鸞聖人は、どのような臨終であろうとも、たとえ苦しみながら死を迎えることになったとしても、信心が定まっていれば必ず往生できると強く主張されているのである。また、親鸞聖人は「さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ」ともいわれている。愚かで智慧のない私たちであっても、尊い臨終を迎えるのだというのである。梯實圓氏は、

もちろん生存欲の強い私どもは、自分の死を、また新しいものの死を「自然」として受け入れることはなかなかできるものではない。「苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生まれざる安養の浄土はこひしからず候ふ」としかいえないものにとつて、いつ死んでもいいという覚悟はめったにできるものではない。しかし、死ぬ覚悟はできなくても、「死ねば浄土」という信心はめぐまれる。「至心に信樂して我が国に生まれんと欲へ」という如来の願いのみ言葉を、はからいなく受け入れればいいのである。そのとき死は空しい滅びではなくて、

愛憎を超え、生死の苦を超えた安らかな涅槃の浄土であるという「いのち」の行方に心は定まっていく。死は、私にとつては悲しい、淋しいできごとにはちがいないが、そのこと自体は空しい滅びでもなく、不幸になることでもない。と領解することができる。・・・中略・・・

限りある「いのち」は、限りない如来の「いのち」に包まれるとき、はじめて真実の安らぎと充実を獲得するといふのである。(28)

といわれている。私たちは、死を意識すると不安になり、死を避けようとする。しかし、死を避けようとしたところで、私たちの前から死が消えることはない。死におびやかされ、空しい気持ちを抱えたまま人生を送ることになるのだ。私たちには、明日も生きられるという保証はどこにもない。私は、親鸞聖人自身も、私たちと同じように死に対する不安を少なからずもっていたのではないかと考える。だからこそ、死と真正面から向き合い、死を受け入れていくことで、自分がどのように生きていくべきなのか、考えられたのではないだろうか。死について考えることは、私たちの生き方を明らかにする第一歩なのである。

第二節 苦しみがあるからこそ

親鸞聖人が書かれた『高僧和讃』に、

生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける

〔註釈版〕五七九頁〕

という箇所がある。まず注目すべきことは、生死の苦しみを苦海とあらわし、そこに漂い流されているのではなく、「ひさしくしづめるわれら」と、苦海の底に沈没しているのが、私たち人間であるといわれている点である。親鸞聖人は大海を苦悩の海として、しかもそこに沈みきっている人間として、自身も含めてあらわされたのである。(29) 浅井成海氏は、この和讃について、

私たちが、長い人生で体験する悲しみや苦しみは、一日や二日、体験したものではなく、それは言葉で表すことができないほど深いものと語られます。われわれは、うかうかと過ごしていますので、なかなかこのようなことには気づきません。ひとたび条件が熟してきますと、これでもかこれでもかと、苦しみや悲しみを体験することになります。もう立ち上がれないような苦しみを体験することになります。それを「ひさしくしづめるわれらをば」とおっしゃっています。事実を見よ、事実より目をそらすな、それこそが我らの「生きる」ということであると示されるのです。(30)

といわれている。私たちが抱いている死に対する不安は、簡単に消えるものではない。死についてはなるべく考えたくないという感情は、多くの人がもっているものである。また、身近な人の死を経験したとき、私たちの心は悲しみで覆いつくされてしまう。さらに、死に対する苦しみだけではなく、日常生活を送る中で、私たちはさまざまな苦悩に直面していく。立ち上がりがたくても、立ち上がることはできない。そのような苦しみは、今までもこれからも、ずっと続いていくものなのだ。親鸞聖人は、この苦しみに満ちた人生を歩む私たちに、本願という大きな船のみが、苦しみの海に沈む私たちを救ってくださると説かれるのである。本願に出遇うということ

の喜びが、苦しみや悲しみを乗り越える力になっていく。親鸞聖人は『教行信証』「行巻」で、

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。 (『註釈版』一八九頁)

とあらわされている。阿弥陀仏の誓いを受け入れて念仏に聞き、念仏申す生活は、光明の広海を大悲の願船で旅するようだと譬えられる⁽³¹⁾。生死の苦海は、光明の広海なのである。これからも、思い通りにいかないこと、予想もしていなかった事実が、私たちの前にやってくるであろう。そうすると私たちは、「どうして私が苦しまなければならぬのか」と、落ち込んでしまうのだ。しかし、どのような苦しみが私たちを待ち受けていたとしても、私たちは、前を向いて進まなければならない。村上速水氏は、

この世には照る日もあり、くもる日もあり、雨の日も嵐の日もあるように、私たちの一生には、笑う日もあれば、泣く日もあります。泣いて悲しみが消えるときもあります。死ぬほどつらい悲しみを、じっとこらえて、強く生きぬかねばならないときもあります。．．．中略．．．

私たちは思いがけぬ不幸なできごとにであったり、信じきっていた人にうらぎられるなど、悲しい人生の現実のためにためつけられて、ともすれば、その悲しみや苦しみのためにうちのめされ、不幸にうちくだかれがちなものであります。私たちはこのような苦痛をのがれて、ただ妄楽の世界に逃げこむのではなくて、受くるなやみを自らの業苦とかみしめて、悲しみにたえ、苦しみをしのいで、泣いたなみだの下から、いまいちど立ちあがって、強く生きぬくちからを体得しなければならぬのであります。

わが浄土真宗の開祖親鸞聖人は、私たちすべての人に、強く正しく生きぬくことを教えられました。そし

て聖人自身も、苦しみをしのび、悲しみにたえて、それらの不幸にうちかち、そこから立ちあがって、朗らかに生きぬかれたのであります。親鸞聖人をして、このように苦しみや悲しみにうちかたしめたものは、阿彌陀仏の本願によって、めぐみあたえられた信心の智慧であり、智慧の念仏のはたらきと力でありました。³²といわれている。私たちの捉えている苦しみというのは否定的なものであり、苦しみから逃れることが幸せに通じる道であると考えます。しかし、その生死の苦しみの中でこそ、自分自身を見つめ直すことができるのではない。その苦しみが縁となって、阿彌陀仏の本願に出会い、そのはたらきを喜ぶことができるのである。

結論

これまで、第一章では現代人の幸福の捉え方や死に対する理解を取り上げ、第二章、第三章では親鸞聖人についての幸せとはどういうものであったのか、生死、そして苦しみをどう受け止めていたのかをまとめてきた。

現代という時代は、科学が発達し、豊かに、より快適に過ごすことができるようになった。しかし、そのような現状になってもなお、私たちのさまざまな欲望は途絶えることはない。自分の思い通りになることが幸せ、自分の思い通りにならないことを不幸せだと思ひ込み、その欲望を満たそうと必死なのである。そしてその欲望が満たされたとき、私たちの心は満足する。だが、欲望というものはそれで終わるといわけではない。また新た

な欲望が次から次へと溢れ出てくるのが人間なのである。欲望を満たすことに一生懸命な私たちは、なるべく苦しみを避けようとする。「苦しみは幸せの妨げになる」と考えている人も多いのではないだろうか。そのことは現代人の「死」の捉え方にもあらわれているように思う。死についてはなるべく考えたくない、死に直面することは避けたいという風潮が現代には多く見られる。幸せになることは善いこと、苦しみに直面することは悪いことだという極端な分別で、私たちは生活しているのだ。しかし、そのように生きていくことで、私たちは心の底から喜びを感じることができのだろうか。自分の行く末を考えると不安で押しつぶされそうになり、目の前の欲望だけに囚われている私たち。今、私たちが心のよりどころにしているものは、とても壊れやすいもので、その喜びも長くは続かない。では、本当の心のよりどころとはどういうものなのか。

親鸞聖人は、さまざまな苦しみや悲しみに直面しながらも、九十年の生涯を生きぬかれた。その中で、生きるということについて問い続けられ、阿弥陀仏の救いについて深く考えられたのである。親鸞聖人は、煩惱は誰もがもっているものであり、それを完全に断ち切ることはできないのだといわれる。私たちに煩惱があるから救われないというのではなく、さまざまな煩惱を抱えながら生きていく自分のありのままの姿を受け止めることの大切さを身をもってあらわされたのである。欲望に囚われ、さまざまな苦悩にあえぐ私たちを大いなる光で包みこみ、はたらきかけてくださるのが、阿弥陀仏の願いであるということをお説かれていく。私がどのような状況にあっても、阿弥陀仏のはからいの中に生かされ、本願に出遇っていくことはたいへん大きな喜びであると、親鸞聖人は心の底から感じられたのではないだろうか。

目の前の欲望を満たすことを第一に考えている私たちは、自分自身が生かされ、願われている存在だということになかなか気づけないでいる。「幸せになりたい」と願い、その願いを叶えようと努力することは悪いことではない。しかし、必死に努力をしても、私たちはさまざまな苦しみや悲しみに直面することになる。そのときに、現実から目をそむけるのではなく、事実と向き合い、受け止めていかなければならないのである。自分を見つめ直し、本当の私の姿を知ったとき、私たちの心は温かく、やわらかいものになるのではないか。阿弥陀仏は、私たち一人一人にはたらきかけ、私たちはその願いの中で生かされている。私たちの心のよりどころとは、目先の欲望を手に入れるということではなく、煩惱にまみれ、苦悩にあえぐ私たちでさえも阿弥陀仏の光の中にあるということのありがたさに気づいて、その喜びを感じていくことではないだろうか。

私たちは普段、阿弥陀仏の光の中にあるということになかなか気づかないでいる。阿弥陀仏の光は、決して目に見えるものではないからだ。親鸞聖人は『教行信証』「行巻」で、

われまたかの摂取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて見たてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといへり。
(『註釈版』二〇七頁)

といわれている。「わたしもまた阿弥陀仏の光明の中に摂め取られているけれども、煩惱がわたしの眼をさえぎって、見たてまつることができない。しかしながら、阿弥陀仏の大いなる慈悲の光明は、そのようなわたしを見捨てることなく常に照らしてくださるといわれる。」³³ということを主張されている。私たちの欲望はなくなることはなく、また、誰もが死をむかえるということ、苦しみに直面するということは、これからはずっと変わらず

存在し私たちの目の前にやってくる。その時に現実から目をそらすのではなく、その事実を受け止めていかなければならない。それは決して簡単なことではないが、私たち一人一人が阿弥陀仏の願いの中に存在するということに気づかされるとき、心に安心が生まれるのである。死や苦しみは、幸せへの妨げになるのではない。死や苦しみが縁となつて、さまざま欲望を抱えている私はどう生きていくべきなのかを考えさせられ、それは阿弥陀仏の願いの中に生きていくことであり、それこそが幸せに通じる道であるということを親鸞聖人は教えられているのではないだろうか。

〈註〉

- (1) 藤利生『幸せへの道』(永田文昌堂・一九八〇年) 一〇〇頁
- (2) 藤利生『幸せへの道』(永田文昌堂・一九八〇年) 五頁
- (3) 小山一行「真の幸福とは―幸と不幸を超えて―:親鸞聖人の立場から」『平和と宗教』二二・二〇〇二年) 三六頁
- (4) 浅井成海『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年) 六六頁
- (5) 小山一行「真の幸福とは―幸と不幸を超えて―:親鸞聖人の立場から」『平和と宗教』二二・二〇〇二年) 三一頁
- (6) 出雲路暢良『現代をどう生きるか』(樹心社・二〇〇九年) 一九頁
- (7) 加藤智見『図説 あらすじでわかる!親鸞の教え』(青春出版社・二〇一〇年) 二〇〇頁
- (8) 普賢晃壽『親鸞聖人と人生』(永田文昌堂・一九九一年) 四九頁
- (9) 青木新門『出会い・出逢い・出遇い』(自照社出版・二〇〇四年) 三五頁
- (10) 村上速水・内藤知康『親鸞聖人のことば』(法蔵館・一九九〇年) 一五七頁
- (11) 加藤智見『図説 あらすじでわかる!親鸞の教え』(青春出版社・二〇一〇年) 一三二頁
- (12) 北塔光昇『三帖和讃』(高僧和讃) 高僧和讃』(本願寺出版社・二〇〇〇年) 二〇二頁

- (13) 『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類―現代語版―』(本願寺出版社・二〇〇九年) 二三四頁
- (14) 村上速水『親鸞教義とその背景』(永田文昌堂・一九八七年) 二二二頁
- (15) 黒田覚忍『三帖和讃―浄土和讃』(本願寺出版社・二〇〇六年) 三六五頁
- (16) 小山一行「真の幸福とは―幸と不幸を超えて―親鸞聖人の立場から」『平和と宗教』二二・二〇〇二年) 三六頁
- (17) 『註釈版』卷末註 一五三七頁
- (18) 村上速水『親鸞教義とその背景』(永田文昌堂・一九八七年) 一九三頁
- (19) 浅井成海『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年) 八一頁
- (20) 『浄土真宗聖典 親鸞聖人御消息 恵信尼消息―現代語版―』(本願寺出版社・二〇〇八年) 二〇頁
- (21) 小池秀章『高校生からの仏教入門―釈尊から親鸞聖人へ―』(本願寺出版社・二〇〇九年) 一七七頁
- (22) 村上速水・内藤知康『親鸞聖人のことば』(法蔵館・一九九〇年) 四〇頁
- (23) 北塔光昇『三帖和讃』高僧和讃』(本願寺出版社・二〇〇〇年) 四五頁
- (24) 靈山勝海「親鸞における無常の概念」『日本仏教学会年報』四六・一九八〇年) 三八一頁
- (25) 浅井成海『いのちを生きる―法然上人と親鸞聖人の教え―』(法蔵館・二〇〇四年) 七九頁
- (26) 梯實圓「日本人の生死観の側面―浄土教徒の場合―」『浄土教学の諸問題 下巻』永田文昌堂・一九九八年) 四三三頁

- (27) 山崎龍明『親鸞に人の生き方を学ぶ』(中経出版・二〇〇四年) 一二二頁
- (28) 梯實圓「日本人の生死観の側面―浄土教徒の場合―」
『浄土教学の諸問題 下巻』永田文昌堂・一九九八年) 四三三頁
- (29) 浅井成海『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年) 一九四頁
- (30) 浅井成海『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年) 一九四頁
- (31) 浅井成海『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年) 一一一頁
- (32) 村上速水『病いに生かされて―親鸞を慕う人生』(樹心社・一九八七年) 一九〇頁
- (33) 『顕浄土真実教行証文類(上) 現代語訳付き』(本願寺出版社・二〇一一年) 二六三頁

〈参考文献〉

・ 聖典

『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』(本願寺出版社・二〇〇四年)

・ 書籍

池田行信『現代社会と浄土真宗』(法蔵館・二〇〇〇年)

尾畑文正『真宗仏教と現代社会』(福村出版・二〇〇八年)

出雲路暢良『現代をどう生きるか』(樹心社・二〇〇九年)

- 加藤智見 『図説 あらすじでわかる！親鸞の教え』(青春出版社・二〇一〇年)
- 村上速水 内藤知康 『親鸞聖人のことば』(法蔵館・一九八九年)
- 藤利生 『幸せへの道』(永田文昌堂・一九八〇年)
- 普賢晃壽 『親鸞聖人と人生』(永田文昌堂・一九九一年)
- 狐野利久 『現代人にとって救いとは―今こそ釈迦の覚った智慧を―』(法蔵館・二〇〇六年)
- 山崎龍明 『親鸞に人の生き方を学ぶ』(中経出版・二〇〇四年)
- 浅井成海 『仏教のこころ 念仏のこころ』(法蔵館・二〇〇〇年)
- 浅井成海 『いのちを生きる―法然上人と親鸞聖人の教え―』(法蔵館・二〇〇四年)
- 浅井成海 『真宗を学ぶ―愚にかえりて―』(永田文昌堂・一九九六年)
- 青木新門・亀井鑛・山崎龍明・小川一乗・香川徹男・向坊弘道・岡百合子・高史明 『出会い・出逢い・出遇い』(自照社出版・二〇〇四年)
- 小池秀章 『高校生からの仏教入門―釈尊から親鸞聖人へ―』(本願寺出版社・二〇〇九年)
- 村上速水 『親鸞教義とその背景』(永田文昌堂・二〇〇八年)
- 村上速水 『病いに生かされて―親鸞を慕う人生』(樹心社・一九八七年)
- 大谷光真 『愚の力』(文藝春秋・二〇一〇年)
- 黒田覚忍 『三帖和讃』 浄土和讃』(本願寺出版社・二〇〇六年)

北塔光昇『三帖和讃』 高僧和讃（本願寺出版社・二〇〇〇年）

『浄土真宗聖典 親鸞聖人御消息 恵信尼消息―現代語版―』（本願寺出版社・二〇〇八年）

『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類―現代語版―』（本願寺出版社・二〇〇九年）

『顕浄土真実教行証文類（上）現代語訳付き』（本願寺出版社・二〇一一年）

『浄土真宗聖典―註釈版・第二版―』（本願寺出版社・二〇〇七年）

・論文

小山一行「真の幸福とは―幸と不幸を超えて―：親鸞聖人の立場から」（『平和と宗教』二一・二〇〇二年）

村上速水「親鸞のよろこび―現生正定聚の理解について―」

（『龍谷大学論集』四〇〇／四〇一・一九七三年～二〇〇三年）

村上速水「『現世利益和讃』の思想背景」（『龍谷大学仏教文化研究紀要』二・一九六三年）

梯實圓「日本人の生死観の側面―浄土教徒の場合―」（『浄土教学の諸問題 下巻』永田文昌堂・一九九八年）

浅井成海「親鸞の生死観」（『日本仏教学会年報』四六・一九八〇年）

日野紹運「生死を超える―親鸞聖人の場合―」（『日本仏教学会年報』七五・二〇〇九年）

鍋島直樹「親鸞における生死の現実」（『真宗学』一〇五／一〇六・二〇〇二年～二〇〇三年）

鍋島直樹「親鸞における死の把握」（『真宗研究』三七・一九九三年～二〇〇一年）

靈山勝海「親鸞における無常の概念」『日本仏教学会年報』四六・一九八〇年